

共同討議

総題「カントと超越論哲学」

提題：長田蔵人（明治大学）・三谷尚澄（信州大学）

司会：嘉目道人（大阪大学）

「超越的学知（scientia transcendens）のゆくえと理性批判」

長田 蔵人（明治大学）

カントの超越論的哲学は多様な哲学的探究にインスピレーションを与えたが、見落とされがちであるのは、カントにとって「可能性の条件」とは、従来の何かに代わるべきものであったという事情である。つまりカントの探求は、すべての〈あるもの〉を根拠づける無条件的な〈第一のもの〉に代えて「可能性の条件」を据えようとする試みであり、この点において、カントにはつねに超越的なものへのまなざしがあった。そこで本発表では、スコトゥス以降の超越的学知の展開の先にカントを位置づける近年の研究を踏まえつつ、カントの超越論的哲学が理性の立場を採ることの意味と必然性の一端をあきらかにし、またそれによって、カントへの評価を再考する手がかりを求めることにしたい。

アリストテレスにおいて、「〈あるもの〉であるかぎりの〈あるもの〉」という普遍への探求は、同時に、「第一のウーシア」という究極を求める神学的探求でもあった。しかしスコトゥスやスアレスにより、前者は超越的学知として純化され、その思想はヴォルフの形而上学体系に帰着する。周知のように『純粹理性批判』の構成は、表向きはそのヴォルフの枠組みを継承している。しかしカントの批判が形而上学の急所として取り押さえているのは、〈あるもの〉の認識と〈第一のもの〉の認識との接続であり、これに対してカントの超越論的哲学は、無条件者を必要としない「現象」の普遍的認識の基礎づけによって、神学の破棄と存在論の刷新を一体的に成し遂げようとする企てである。したがってその批判的探求の標的は、「第一であることで普遍的である」（Arist. *Met.* 1026a31）という原初的構想であり、その取組みを通じて超越論的哲学は、超越的学知の継承と終焉という両義性を持つことになる。

カントにとってそうした批判的継承を可能にした要因の一つは、すべての〈あるもの〉を推論体系のうちに捉えてその無条件的前提を求めようとする理性の「論理的要求」、という理解である。その理性を「原理の能力」とするカントの定義もアリストテレスの「ヌース」に淵源が求められるが、「すべての」という普遍の次元は、そうした原理からの論証としての学知によるのみ到達可能な、学知の目標そのものである。このアリストテレス的思考の脈絡に置くならば、カントの言う人間理性の「特異な運命」とは、人間の学問的本性を指す言葉にほかならない。そのような理性の要求を或る仕方で是認しかつ否認したところに、カントが超越的学知の継承者たりえた要因が確認される。

他方で、「学問としてのXはいかにして可能か」という『批判』の問いに示されるように、無条件者に代わるべき「可能性の条件」も、学知の可能性の条件である。つまり理性の関心にとってもカントにとっても、問題は学知の可能性である。したがってカント哲学を適切に評価するには、それを学問論として見る視点が欠かせないだろう。

「アприオリに可能である限りにおける、認識の仕方に関する認識」のありようを明らかにすることで、判断の規則としての「カテゴリー」が経験的認識の対象に適用可能であることを演繹する。あるいは、「善意志」や「義務」をめぐる通常の認識から出発し、「定言命法」や「意志の自律」といった概念を導出することで「道徳の形而上学」の「基礎づけ」を行う。カントにおける超越論哲学（もしくは批判哲学）の構想が、以上のような根本的発想のもとに、経験的認識や道徳の実践を安定した理性的秩序のもとにもたらしことを狙いとして遂行されていることに異論を差し挟む人はいないであろう。そして、十八世紀啓蒙思想の申し子たるカントのそのプロジェクトが、その生誕から三百年を経た今日に至るまで、毀誉褒貶さまざまな歴史的評価にさらされてきたことを私たちは知っている。

一方において、「可能性の条件」を眼差す超越論哲学の根本構制は、懐疑論の論駁や倫理規範の普遍的基礎づけを試みる「超越論的論証」や「討議倫理学」といった強力な哲学的継承者を生み出してきた。しかし、他方において、さまざまな懐疑や混乱を理性的秩序のもとに回収し／解消させることを試みる超越論哲学のプログラムが、その中核的コミットメントとしての理性主義的特性を標的とするさまざまな疑念や異議申し立てにさらされてきた、という歴史的経緯にも私たちは注意せざるをえない。カントの理性主義的コスモポリタニズムは西洋の価値規範を非西洋文明に押し付け、理性的空間の外部に位置する非理性の声を巧妙かつ権力的な仕方であくまで暗黙のうちに封じ込め、排除するのではないか――。

このような状況を念頭におくとき、「カント『と』超越論哲学」と題された本共同討議のテーマ設定は、超越論哲学の歴史的評価をめぐる問題状況にきわめて興味深い視点を切り開いてくれるように思われる。というのも、批判期の哲学に顕著なように、理性的普遍主義への頑健なコミットメントを旗印とする思想を展開してみせるその裏側で、一七六〇年代における非理性や狂気に対する真剣な取り組みが強く示唆するように、「理性的であること」自体に伴う危機や危険――すなわち、啓蒙のプロジェクトや理性そのものに不可避的について回らざるをえない闇の側面――に対しても鋭い洞察を示してみせる点に、カントその人が展開する思索の根本的特性を見出すことができるようにも思われるからである。

このような背景を踏まえつつ、本発表では、超越論哲学の原風景とも言うべき思考の姿を前批判期のカントのうちに探し求めることを通じて、これまでに考えられてきたのとは違った方向から「カント的超越」の哲学的可能性に探りを入れてみることにしたい。あるいは、より突っ込んだ言い方をして、理性空間の外部に位置するさまざまな逸脱的言説と正面から向き合うための予備学として超越論哲学を捉え直し、そのことを通じて、非理性的なものどもを飼い慣らすのではなく、非理性の声たちとの共存／対話の可能性を確保することに眼目を置いた新しい超越論哲学の可能性を浮き彫りにすることを試みてみたい。